



研究

芸術文化学部 日本文学科

創作



日本文学科長  
灰谷 謙二

「Z世代」と括られてしまう人たちがいます。「タイパが良い」と短い尺のなかで、スマホを片手に、欲しいもの見たいものだけ、気軽に手軽にうけとりたい。こんな感情は必ずしも世代的に括られるものではない気がします。時間をかけて受けとらなくてはならない、複雑で多量な情報にじっくり向き合うことや、言語化しにくい複雑な状況や感情、論理的思考を、丁寧に構築していくような、精神的な負荷のかかる作業がさけられていく傾向もあるのかもしれない。

日本文学科が目指し、向き合おうとしているのは、この人間の複雑な精神的営みを、ことばという形式と制度で表現したもの(文学や言葉や文化)を通して理解しようというものです。しかし、ことばは、もとより完璧なコミュニケーションや思考のツールではありません。ことばを通じた他者理解、外界把握は、辛抱強く、丁寧に時間をかけておこなわれることを前提にしています。その困難さに向き合うことの果て無さは、「人とはなにか」という人文的問いそのものの無限性と同根でしょう。

学生が主体的に学びを進め深めていくなかでも、そこにかかる一定の時間を大事にしたいと考えています。それはきっと「醸す」という行為や現象に近い。結果だけを考えた効率が求められる時代の空気のようなものがあるとすれば、その流れに竿さしても、必要な時間をかけ、待ちながら、ともに学ぶものでありたいと願っています。



学科紹介動画はこちら

## 日本文学科の入学者の受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)

日本文学科では、豊かな人間性と幅広い視野、高度な言語運用能力をもとに諸共同体のリーダー・教育者・創作者等として主体的に社会に貢献できる人の育成を目指しています。自らの力でテキストの精読や実地調査に基づく分析を行い、他者との議論や対話を通して言語文化の探究と創造に取り組む活動に重点をおいた教育を展開します。

このような教育理念・目的に基づき、日本文学科は次のような人を求めています。

- ・高等学校等までの教育課程において確かな国語の力を身につけた人
- ・問いをもって対象に向き合い、論理的に思考し判断する力を鍛えてきた人
- ・知的探究心をもって日本語・日本文学を深く研究していく意欲がある人
- ・文学作品のもつ多様な価値観を柔軟に受け止められる人
- ・読解力・表現力・対話力を活用して協働的に社会に参画する意欲がある人

## 日本文学科の授業

日本語学・日本文学・中国文学・欧米文学と、周辺領域である、民俗学・伝承文学・文芸創作・国語教育学等を専門教育科目とし、専門教育科目に発展的に関連・連携する、学部特性を活かした学部共通科目、教養教育科目を配置しています。

自らの力で文学や言語についての資料を調査し、読み解き、それをもとに論理的に思考し、言語文化の探究と創造に取り組むために、議論や対話を重視した専門演習を配置します。これら言語文化の探究と創造の成果として、卒業論文・卒業制作を課しています。

豊かな人間性と幅広い視野をもって、高度な言語運用能力を発揮し、他者と議論や対話をおこなうための、少人数双方向教育を実施します。

日本文学科では教員と学生の親睦、同じ学年や学年を超えた学生間の親睦、あるいは自分の研究や学識を広げ深めるために、次のような学科や学会主催の行事を行います。



これから4年間をともにする教員や学友と対面です。

4月  
入学式

新入生歓迎会



5月  
おのみち文化スタディ

スタートアップ日本文学

7月  
キャンパスツアー

8月  
オープンキャンパス

9月  
フィールドワーク

10月  
卒業論文中間発表

12月  
おのみち文学三昧

1月  
卒業論文提出

2月  
卒業論文口頭試問

3月  
学位記授与式



晴れて卒業の日を迎え、新たな一歩を踏み出します。



新入生は5人程度のグループに分かれ、それぞれのチューター教員から大学生活について説明を受けます。



オープンキャンパスでは、在学生が大学生活で得たものを惜しみなく伝えています。



「文学のこみち」にある子規の句碑  
(尾道市／撮影：石橋璃子)



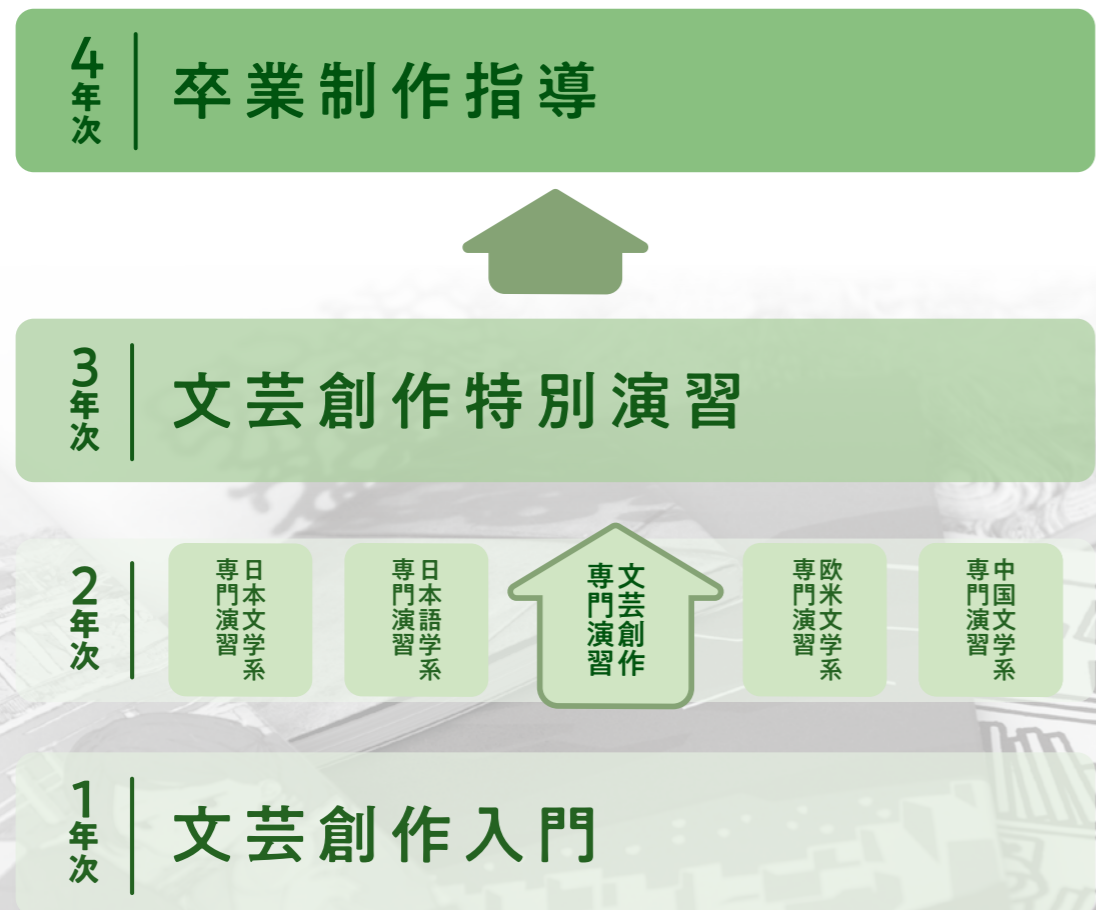
『源氏物語絵巻』を所蔵する徳川美術館  
(名古屋市／撮影：内田花香)

テーマ設定から調査、分析・考察、成果報告まで、学生自身が主体的に行う授業です。



4年間の集大成、「卒業論文」を提出する決定的瞬間！

尾道市立大学日本文学科では、学生自らが新たな文学作品を創作し卒業制作として提出する〈文芸創作プログラム〉があります。



4年次には文芸創作専門演習担当者の指導・支援を受けながら卒業制作を進めてゆくことになります。  
※3年次には文芸創作以外の専門分野の教員のもとで、情報・資料収集能力と分析力、そして客観的な言語表現（考察を形にする文章表現・自分の考えを的確に受け手に伝えるプレゼンテーション能力）を強化するためにそれぞれの分野の研究に取り組みます。

小説、俳句、漢詩、児童文学など、各分野の研究者・作家が交替で講義・課題作品の添削指導を行い、文章表現力を高めてゆく授業です。

いまや一番身近な文芸形式である小説は、会話、記録、報告、解説など、日常生活で触れるあらゆる言語表現を取り込む形で組み立てられています。文芸創作入門では、普段はなんとなく眺めているそれらの形式に意識的に向き合っ、その構成をなぞる・真似る・学ぶことで、文芸創作を進める「基礎体力」を身につける訓練を進めてゆきます。

#### 文芸創作を志望する人たちの取り組み

文芸創作入門、文芸創作専門演習、文芸創作特別演習を経由して卒業制作に取り組むまでの間に、文学賞への応募や文芸誌への投稿などを目指し、学内での訓練・学修の範囲にとどまらない創作活動を進める人たちもいます。文学賞への応募準備として作品をまとめた方からのメッセージをご紹介します。



日本文学科4年  
国則 達也

#### 作品タイトル「ちぎれた蝶の翅」

- ・作品ジャンル：青春小説
- ・創作に役立った、文芸創作関連科目以外の大学の授業：  
近現代文学に関する授業。原先生の「日本の文学」。欧米文学に関する授業。中国文学に関する授業。民俗学に関する授業。美術史に関する授業。
- ・日本文学科で創作に取り組みたいと考えている人へ：  
普段の生活で当たり前に見たり使ったりするものでも、その名前は知らないことがよくあります。「これって何て言うんだろう？」という、モノの名前や言い方に対する疑問を日頃から持つようにすると、語彙力や表現力といった文芸創作の素地が出来上がってくるとおもいます。

#### 卒業制作のジャンル等

卒業制作では、主に小説の執筆に取り組む人が多いですが、戯曲を書いて上演したり、オーディオドラマの脚本を書いて制作したり、詩作と批評を組み合わせるなど、形式も様々です。ジャンルもミステリー、SF、ファンタジー、歴史小説、時代小説など多岐にわたり、複数のジャンルを横断するような形でライトノベル要素の強い小説を書き上げる人もいれば、いずれかのジャンルに単純には分類することのできない複雑なモチーフ・テーマを取り上げる人もいます。



## 日本語学 (古典語)

日本文学科・准教授  
藤本 真理子

日本語の歴史的变化を中心に研究しています。

今、私たちが話したり書いたりしていることばと、昔の人のことばとは、どこかでつながっているはずなのに、どんなふうが変わってきたのか、まだまだ分からないことがたくさんあります。

古い資料の全てが残っているわけではありません。そのため、これらの資料の点と点をどのようにつないで、歴史や変化の線を描いていくのかは私たちに任されています。

そのときヒントになるのは、他の国のことばや、日本の中の方言など、さまざまなことばの変化です。そうして描き出したストーリーはまた、ことばの世界を広げていくものになるでしょう。



## 授業風景 古典語学専門演習(万葉集)

2022年度の古典語学専門演習は、上代に詠まれた歌を観察できる『万葉集』を扱いました。

茜草指武良前野逝標野行野守者不見哉君之袖布流  
というようにすべて漢字で表記されているのが大きな特徴です。これを見ると現代との違いに驚いてしまいますが、漢字の音や意味は現代と共通する部分も多く、上の歌は次のように解釈できます。

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る  
平安時代に作られた辞典や近世から現代までの研究を頼りに、先生やほかの受講者と交流しながらじっくりと読むことができました。

また、この『万葉集』から一つクイズです。いったいどのように読んだらいいのでしょう。

馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿

馬の鳴き声はイン?蜂の羽音はブブ…。平安時代初期の辞典『倭名類聚抄』からは「石花」は「勢」と読むことが確認できます。あとは漢字の音読みや訓読みを組み合わせると「馬声」=い、「蜂音」=ぶ、「石花」=せ、「蜘蛛」=くも、「荒」=ある、「鹿」=か、と読むことができます。

平仮名がつくれる以前、漢字の使い方を工夫して、時にはこのように遊び心をもって、日本語は表記されていました。現代との表記の違いに苦しみつつ、面白さも感じながら授業に取り組みました。

日本文学科3年 原 優花



## 日本語学 (現代語)

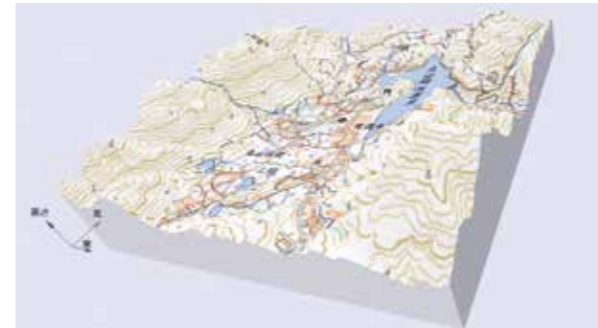
日本文学科・教授  
灰谷 謙二

現代語学ゼミは、日本語についてとくに、現代語の話し言葉にかかわることを中心に学んでいます。

モバイルメディアの発達で、話し言葉と書き言葉の境界線を大きく変えつつあり、私たちの言語生活のすがたそのものも、メディアの発達に揺さぶられている大きな転換期にいるのかもしれない。

扱う問題は身近なものからスタートします。どうしてこういう言い方をするのだろう?なぜこういう表現になっているんだろう?という人がこういう言い方をするんだろう?といろいろな問いがたてられますが、あたりまえのように使っている日常語の中から、意識してそのような問いを見つけて、学術的なレベルの課題に育てていくには、知識も慣れも必要です。

その課題を解決するためには、その人の視点・観点であつめられた、文字になっていない言語資料を自分のちからで集め他人と共有できる形に整えなくてはなりません。自分しかもっていない一次資料をつかって、自分の問いを解決していくプロセスは、きっとだれかの心に響き、それは面白いねと思ってもらえる。他者と関わりあえる課題になっていきます。そのようなプロセスを経験することを大事にしています。



国土地理院地図 (電子国土 Web) より 久山田水源地 3 D

## 授業風景 日本語学講義Ⅱ

1年生の必修科目日本語学概論では、日本語学という分野の枠組みや方法のあらましを理解します。2年生の日本語学講義Ⅱでは、ことばをみつめる目、分析し記述し説明するためには、どのような具体的な方法がとられるのかを学びます。私が示す出雲方言の分析を例にしながら、出身県別のグループで、「伝わりにくい、でもわかってほしい郷里のあの方言」のようなものを一つ取り上げて、説明します。最終的に聞いている皆が意味や用法を理解して自分で新しい文を生成できるようにするにはどうしたらいいかを考え、工夫をこらした資料をつくり発表・質疑応答をします。



気づかない広島方言「たちまち(とりあえず)」



## 日本語学（言語学）

日本文学科・講師

高島 彬

なぜ世界には多くの「ことば」があるのでしょうか？もしこの世界にある「ことば」が1つだけだったら、外国語を勉強せずとも、世界の多くの人と仲良くなれるのに…そう思ったことはありませんか？

私たちは日々「ことば」を用いて他者とコミュニケーションをとりながら生活しています。生活の中で、我々は世界のどこに注目し、それをどのように解釈し、表現しようかと考えながら話しています。日常の表現の集積が「ことば」となることを考えると、世界に多様な「ことば」があるということは、それぞれの「ことば」ごとに世界の切り取り方や捉え方の趣向が異なっている、ということになります。つまり、「ことば」が違えば、その「ことば」を話す人々の世界の捉え方・見え方も異なっているといえるのです。この意味で「ことば」を知ることは、世界各地の人々がどのように世界を捉えているのかを知るにつながります。

私はこのような認知言語学の観点から、「ことば」と人間との関係について日々考えています。日常のささいな発見や気づきが人生を面白くします。しかし、このような発見や気づきは、当たり前すぎて、多くの人々がその面白さに気づいていないと思うのです。何気なく使っている「ことば」もよく観察してみると、不思議なことであふれています。学生には、「ことば」を通して、自分たちの当たり前の世界に埋没することなく、「ことば」の面白さに気づき、深く考え、人生を楽しく生きてほしいと願っています。

### 授業風景 日本語表現法

日本語表現法では、エッセイやレポートなどの基本的なルールについての知識を学び、実際の文章作成に取り組んでいます。同じ物事であっても時と場合に応じて、表現の仕方は異なります。例えば、ビジネスの場面であれば、誰に向けた文章であるのかによって、伝え方（端的に伝える表現、詳細に伝える表現、相手に配慮した表現、…）が異なりますし、誰かに出来事や物語を語る時も、語り方（劇的に伝える、面白く伝える、事実のみを伝える、…）が異なります。

この授業では、文章作成の技術だけを習得するのではなく、どう文章を書けば相手に自分の伝えたいことが伝わるのかを考え、使い分けられる思考力も身につけていきます。



## 日本中古文学

日本文学科・教授

宮谷 聡美

私がこれまでずっと関心を持ってきたのは、『伊勢物語』などの歌物語とその影響力についてです。

『伊勢物語』には、日本の和歌や歌謡、漢文学などをふまえたさまざまな物語が含まれ、歌をよむことで心が伝わることへの希望を描いています。歌物語が生み出されたのは平安前期のごく一時期的ことですが、その発想や方法は、『うつほ物語』『源氏物語』などの長編物語の創作にも活かされていきました。

文学への関心は「自分」への関心でもあります。すでに表現されたものの中に共感できる価値観を発見することには、自分の価値観に保証が与えられる安心感があり、それがいつかどこかで「自分」を支えてくれることになるでしょう。



### 授業風景 中古文学専門演習

中古文学作品の多くは、注釈書という形で過去に考えられた作品の解釈を読むことができます。中古文学専門演習では、その注釈書を複数参考にしながら、前期に『古今和歌集』、後期に『枕草子』の解釈を考えていきました。自分の考えをまとめられたと思っても、いざ発表すると他の受講生から違う視点の意見をもらったり、新たな課題が見つかったりします。

作品の読みに正解は無く、今では分からないことも多いので推測しながら考えるのは大変ですが、中古文学について知識を深めながら自分の視野も広げることができる授業だと思います。



昨年度前期は、夏の歌と恋の歌を取り上げました。夏の歌にはホトトギスがたくさん詠まれています。

文・画 日本文学科4年 北村 碧



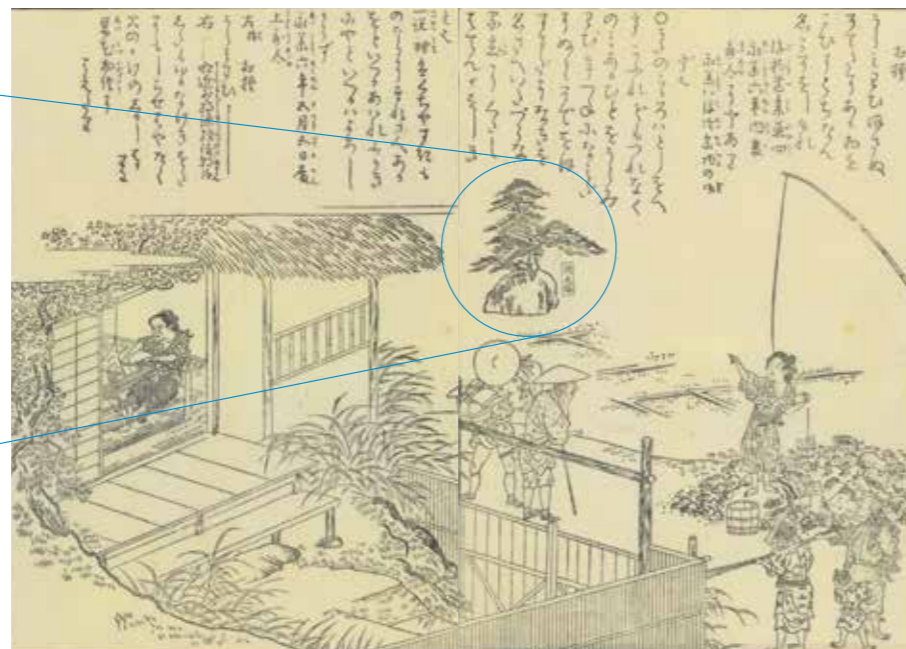
## 日本中世文学

日本文学科・教授  
藤川 功和

**本** 離れが進む昨今、出版社は売る為の様々な**工夫**をしています。

そのような工夫は、**江戸時代**の本にも見受けられます。例えば、右の**絵**入り本『百人一首』からは、どのような工夫を**読み解く**ことができるでしょうか？

相模の「うらみわびほさぬ袖だにある物を恋にくちなん名こそ惜しけれ【涙に濡れて乾く間もない袖さえ朽ちてしまいうそのに、その上、名も朽ちるのが惜しい】という詠歌内容を絵で表している（歌意絵）はずなのですが…



尾道市立大学附属図書館蔵『百人一首図絵』より



**正解**はこちら!!



## 日本近世文学

日本文学科・講師  
吉田 宰

日本近世文学とは江戸時代の文学のことで、私は近世中期（1700年代頃）の文学を中心に研究しています。とくに当時の文学が同時代の思想や自然科学と、どのように関わっているのかという点に興味があります。そのため、いわゆる「文系」「理系」といった今日的な枠組みにはとらわれず、分野横断的視点から考察を深めていくところに私の研究の特色があります。また、近世中期における本屋の出版活動についても調査を行っています。

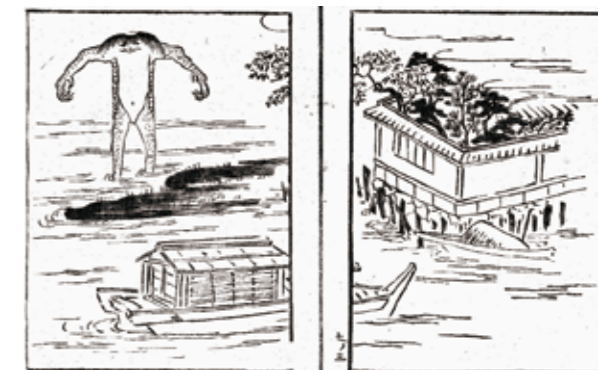
近世文学の研究では、浮世草子や読本といった近世小説だけでなく、妖怪や遊女、さらには本草・博物学といった一見すると文学とは無関係に思われるものまで、あらゆるものが考察対象となります（かくいう私も、近世中期のある文学作品に描かれたカップの挿絵と当時の博物図譜との関係を調べたことがあります）。

近世文学を通して様々な物事を多角的に捉えることは、現代において「当たり前」と認識している枠組みを相対化し、改めて考え直すよい機会となります。またそれ以上に、自分の興味にしたがって、その知的好奇心を満たせるというのは実に幸せなことです。

既存の枠組みに縛られず、自らの関心がおもむくまま、ぜひ一緒に学びを深めてみませんか。



上田秋成『雨月物語』所収「青頭巾」挿絵  
国文学研究資料館蔵本  
(CC BY-SA 4.0、「国書データベース」より)  
<https://doi.org/10.20730/200014740>  
※『雨月物語』は日本文学講読Ⅳ（近世）で扱います。



平賀源内『根南志具佐』に載るカップ図  
国文学研究資料館蔵本  
(CC BY-SA 4.0、「国書データベース」より)  
<https://doi.org/10.20730/200004190>  
※『根南志具佐』は日本文学講義Ⅱ（近世）で扱います。



## 日本近現代文学

日本文学科・教授

柴 市郎

私の専門領域は日本近代文学です。明治時代から昭和期までの文学を主要な研究対象としています。作家で言えば、夏目漱石や小林秀雄といった文学者たちが対象です。さらに現在は、自分の研究領域を小説や評論といったジャンルに限定せず、映画など活字メディア以外の分野についても考察しています。

近年、文学研究の世界は多様化し、一昔前では文学研究の領域とは見なされていなかったジャンルに関する研究もなされるようになってきました。学会の研究誌にも、アニメーションなどのサブ・カルチャーや映画に関する研究論文が掲載される時代になりました。

こうした新たな文学研究の動向にも配慮し、多様なジャンルの表現にも視野を広げてもらえるよう、講義・演習をおこなっています。右は、近現代文学専門演習という授業において、学生たちが自主的に取り組んだ研究テーマをもとに、岡本彩夏、近藤泰成、篠原亜友、永岡侑里子、原悠馬、千々和朋憲（卒業生）がデザインしました。これをご覧いただくと、文学の勉強と言っても、有名な作家や小説についての研究ばかりでなく、今日では実にさまざまな切り口があることをおわかりいただけると思います。



吾輩ハ猫デアル  
(上編・中編・下編)

夏目漱石



## 日本近現代文学

日本文学科・教授

原 卓史

### 研究対象

坂口安吾・太宰治などの〈無頼派〉〈新戯作派〉や、歴史小説・時代小説を中心に研究活動を行っています。作者の意図を考えることだけが文学研究ではありません。時代背景の考察、歴史的な文脈の中での作品の位置づけ、文学理論の援用など、ありとあらゆる可能性を考え小説を読み解いていきます。また、歴史小説・時代小説を中心とした大衆文学についても興味を持っており、ライトノベル、マンガ、アニメ、映画、ドラマなど、領域横断的な研究も行っています。



### ゼミ風景

2023年度は、4年生8名、3年生5名でゼミを行います。学生は卒業論文(論文テーマ:石川淳、江戸川乱歩、太宰治、谷崎潤一郎、宮沢賢治、村上春樹、夢野久作など)を執筆します。また、文芸創作を卒業制作にする学生も3名います。いい卒業論文を書くためにはいい論文をたくさん読まなければなりません。また、いい小説を書くためには、いい小説をたくさん読まなければなりません。

### 授業

前期:日本の近現代文学について学ぶ教養科目の「日本の文学」、代表的な日本近代文学の作品を読む「日本文学史」、昭和期の小説について学生が発表を行う「近現代文学専門演習」などを担当。

後期:葉室麟『柚子の花咲く』の精読を行う「日本文学講読」、坂口安吾「明治開化 安吾捕物帖」について考察する「日本文学講義」、日本近現代文学の短篇小説について学生が発表する「近現代文学専門演習」などを担当。

### 著書&編集協力

2013年に刊行した『坂口安吾 歴史を探偵すること』と、編集委員の一人として2022年に出版した『坂口安吾大事典』です。







## 国語教育学

日本文学科・教授

信木 伸一

「国語教育学」は、一言で言えば、ことばの力の教育を研究する学問です。"ことばの力"とは、ことばによって自分と〈世界〉や〈他者〉との関係を新たに創り出したり別様に組み替えたりする力です。これは、よりよく生きることに大きく関わる学力だと言えるでしょう。

読む力を例に考えてみましょう。読むということは、新しい自分を作っていくことに関わっています。小説にせよ評論にせよ、表現されたものはすべて、それを書いた人が意識せずとも、自分の生きる社会や文化の中での何かを問題にとりあげて、自分にとっての現実の意味を付け加えて創り出したものです。読む人から見れば、書いた人が、現実の問題をめぐって、何かを問ひかけ、私たちの認識システムに働きかけているのです。その問ひと現実の意味付けをめぐって、私たち自身のことばを紡いでいく対話的な読み方ができれば、ただ相手の考えや情報を受容するだけでない、新しい見方や考え方を創造する読みができるでしょう。読むことが面白いと感じられるのは、こういうことが起こっているときなのです。こうした読みをいかに成立させるかというこの理論や方法を探求するのも国語教育学の研究テーマの一つです。

国語教育学は、これからの言語文化の創造していく担い手を育てることにめざしています。文学やことばについて深く学び、これを国語教育の場で活かす人を育てたいと考えています。

## ゼミ風景

ゼミでは、主に国語教育について興味のある学生が研究活動の報告を行い議論します。研究内容は国語教育の多岐の方面に渡りますが、私はその中でも国語教育における「聞くこと」の学習指導について、教科書の内容分析や文献の参照を通して研究を進めています。先生の適切なご指導の下、仲間と切磋琢磨しながら研鑽を重ねられる、非常に良い環境で学ぶことが出来ます。国語教育に興味・関心を抱いている方は是非ご一考ください。

日本文学科4年 三谷夢衣

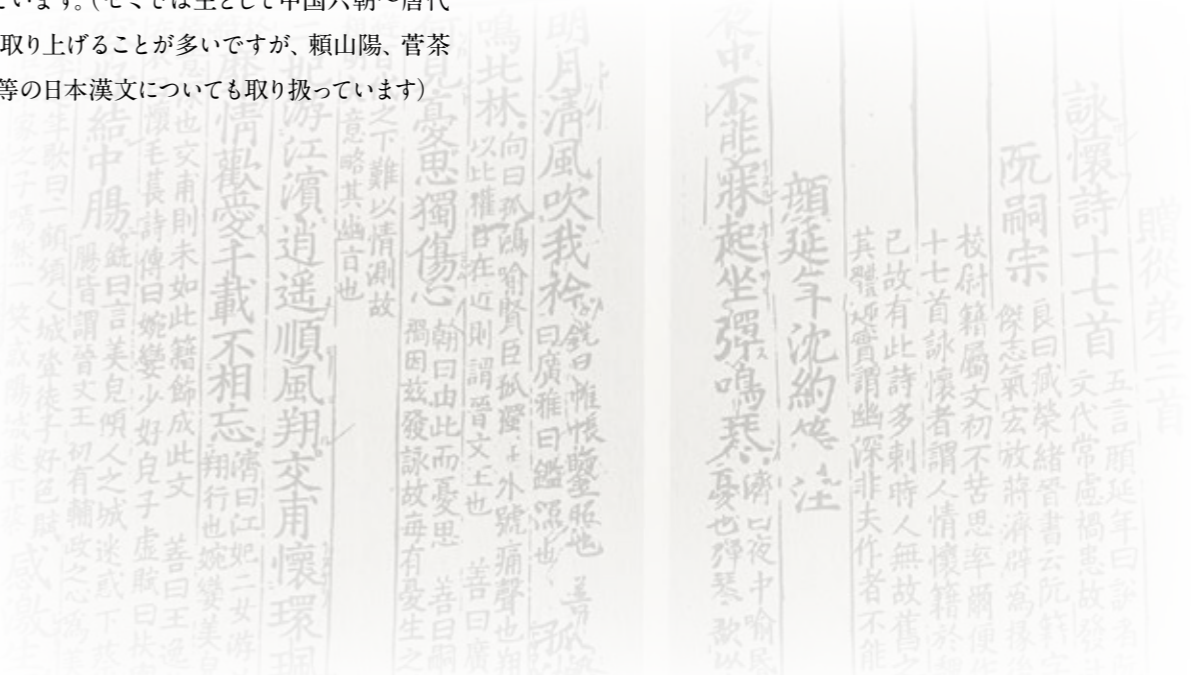


## 中国文学

日本文学科・教授

鷹橋 明久

現代の日本は、欧米文化の影響下にありますが、明治以前にあっては、千数百年にわたって、中国文化の影響を受けてきました。したがって、中国の伝統文化は日本文化の基層に濃密に埋もれ、現代を生きる日本人にも無意識のうちに作用しているといえます。中国の古典文学に触れることにより、われわれ日本人の体質の底辺に潜み、もはや皮膚感覚にすらなっているもの呼び覚まし、発掘していきたいと思ひます。そして、現代を生きる我々が見失ってしまった生き方や考え方の素晴らしさを、皆さんと一緒に享受していきたいと考えています。(ゼミでは主として中国六朝～唐代の詩や小説を取り上げることが多いですが、頼山陽、菅茶山、橋本竹下等の日本漢文についても取り扱っています)





## 欧米文学

日本文学科・教授

小畑 拓也

### 専門分野

20世紀中頃以降のアメリカのSF (science fiction/speculative fiction) を研究対象にしています。20世紀中頃以降の人文・社会・自然科学の成果により世界を捉える解像度が高まったおかげで、現在では、もともと多様であった人の生／性のあり方、世界の複雑さへの認識が広まっています。しかし残念ながら、「少数派」を抑圧して優位に立ち続けたい「多数派」の拠り所として、前時代的な「常識／自然」などの、世界を単純な構図に落とし込むための「毒になる物語」もいまだに力を持ち続けています。文化研究 (cultural studies) の立場から、娯楽として消費されるステレオタイプ化したイメージ (ロボット、異星人、モンスターなど) の分析・再解釈を通じて、「毒になる物語」への解毒剤を提供することを目指して、試行錯誤を続けています。



### 授業・演習

「欧米文学概論」・「欧米文学講義」・「比較文学」の講義科目では、「文学」との関わり方を「趣味・消費」から「研究・再生産」へと切り替えてゆく上で必要となる、術語の提示・解説に注力しています。演習科目の「欧米文学専門演習」では、受講者が自身の興味関心のあり方に応じて主体的に文学研究に取り組んでゆくための、情報収集と分析の訓練を積んでもらうことにしています。

### ゼミ

英米文学の研究者である私が日本文学科で受け持つ特殊なゼミであるため、外国語の資料を通じて積極的に情報収集を進める意欲を持つ人の参加を求めています。



## 民俗学・伝承文学

日本文学科・教授

藤井 佐美

文学と民俗学の交わりから日本の伝承文化を研究しています。個人的には昔のお坊さんがお説教に取り入れた昔話や伝説、口伝の世界を研究対象としながら、地域の民俗調査も進めています。まったく別世界に思われる分野が自然に結びついたとき、日本文化の奥深さを実感すると同時に伝承の世界が少しずつ身近になります。ゼミには好奇心旺盛な学生達が集まり、自分達の意外な面を発見しているようです。



### ゼミ学生の研究テーマより

大分県のツガニ伝説  
東広島市西条の民話  
日本霊異記の地獄思想  
三途川の奪衣婆伝承  
浄土僧袋中の夢記『寤寐集』研究  
長崎県壱岐島の昔話研究  
岡山県の昔話研究  
『今昔物語集』の茸説話  
蛸の昔話(創作)  
絵巻物の百鬼夜行  
福井県小浜市の八百比丘尼伝説  
長崎県長崎市の汚池姫伝説  
呉市の音戸の舟唄  
山椒魚の伝承研究  
鳥取県の赤松池伝説  
三重県の祭祀とダンダラボッチ  
大分県の真名長者伝説  
島根県雲南市の神楽  
山口県湯田温泉の開湯伝説  
徳島県の首切れ馬伝承  
兵庫県佐用町の晴明塚・道満塚  
尾道市御調町の昔話・伝説  
広島県安芸太田町の伝説  
高知県の妖怪シバテン  
広島県府中市の七ッ池伝説

和気姫伝説と瀬戸内の祭祀  
福山市神辺町御領の鬼伝説  
東広島市の菖蒲前伝説  
岡山県のさんぶ太郎伝説  
尾道の浦島太郎と竜宮伝説  
岡山県の温羅伝説  
流し難  
四国の狸伝説  
鬼が神になる祭  
大分県姫島の神話と伝説  
絵巻の動物たち  
神楽研究  
全国の山姥伝説  
月見と禁忌  
御伽草子と昔話  
広島県竹原市の塩田文化  
雨に関する古代表現  
災害を伝える民話  
日本の地藏信仰  
愛媛県中島のおみどり神事  
姑獲鳥の歴史  
羽衣と天人女房  
島根県の丹塗箭伝説  
尾道市の祭祀と民話  
瀬戸内海のカラスの神事



## 英語

日本文学科・教授  
高垣 俊之

私は主に2, 3年生を対象に英語を教えています。学生の皆さんの中には、大学に入ってから英語を勉強しなければならないのかと溜息をつく人がいるかもしれません。しかし、洋の東西を問わず、有名な作家や知識人の多くは外国語学習あるいは外国生活を通して言語観や表現技能を高めていったと思われる節があります。皆さんにも意欲的に外国語と格闘してもらい、母語と外国語の言語能力に磨きをかけてもらいたいと願っています。

研究面では、英語の習得と使用に関する諸問題をマルチリンガリズムの枠組みの中で考えています。研究成果としては以下のようなものがあります。

- ・『新装版:カナダの継承語教育—多文化・多言語主義をめざして』(2020)共訳,明石書店
- ・『英語デトックス:世界は英語だけじゃない』(2016)分担,くろしお出版
- ・『英語の習得と使用—バイリンガリズムの視点から』(2014)単著,溪水社



## 英語

日本文学科・教授  
平山 直樹

私の専門分野は英語学で、15世紀イギリスの名家であるパストン家の人々が生きた日常の手紙や法的文書などの英語を研究しています。現在は、接続詞などのつなぎ表現に注目しています。手紙の中では、当時高価であった羊皮紙の節約、または口述筆記の速記のためか、“and”の代わりに記号の“&”が使われたり、“pat (= that)”を短縮した“p”が使われたりしています。それらがどのように使用されるかを、手紙の送り手と受け手の社会的な関係や、日常の手紙や法的文書など文書形式の違いに着目して調べています。

授業は教養教育科目の英語を担当しています。TOEIC対策の授業では、テストへの対応力だけでなく、ビジネスや日常の場面で使う英語の基礎力を身につけることを目指します。また、読解演習を中心とした授業では、文構造や談話構造、更に異文化コミュニケーションを踏まえた解釈をする練習を繰り返します。これにより、辞書と読解方略を組み合わせて英文を正しく読み、授業後の自己学習力を身につけることを目指します。



14-15世紀にパストン家所有の家があったと言われている、英国ノリッジのエルムヒル



## 尾道文学談話会



尾道文学談話会会報 第13号表紙デザイン  
美術学科卒業生 上田 彩乃

日本文学科を中心とする本学の教員が文学や言葉にかかわるさまざまな話題を提供し、地域の方々と大学の外で語り合う形式の公開講座です。ここでの成果は毎年『尾道文学談話会会報』にまとめられており、会誌の内容はインターネットでもご覧いただけます。



会報第13号はこちら

## 2023年度・尾道文学談話会 (全5回)

- |     |  |
|-----|--|
| 第1回 | 昔話の夢 —信じ続けた人—<br>藤井 佐美 (日本文学科教授)             |
| 第2回 | 『雨月物語』を読む(6) —「吉備津の釜」—<br>藤沢 毅 (尾道市立大学学長)    |
| 第3回 | 『百人一首図絵』の戦略<br>藤川 功和 (日本文学科教授)               |
| 第4回 | 心に残る教科書教材<br>信木 伸一 (日本文学科教授)                 |
| 第5回 | 志賀直哉と尾道 —基本的事項の理解のために—<br>寺嶋 雅人 (尾道市立大学名誉教授) |



# 高橋新太郎文庫

近代文学研究者、学習院女子大学教授・高橋新太郎氏(昭和7～平成15)は、貴重な資料を含む膨大な蔵書を残されました。そこには、作家の自筆原稿や書簡、演劇関係のパンフレットなど芸術的にも興味深い資料が多数含まれています。日本文学科生有志による高橋新太郎文庫研究会では、これらの貴重な資料の整理、データベース化作業に取り組んでいます。

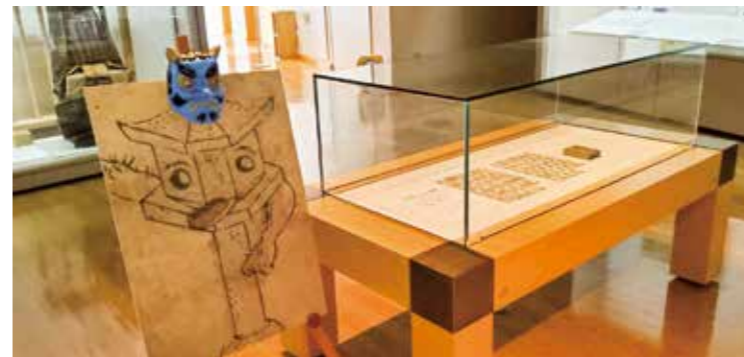


カストリ雑誌の一部



# 伝承文化研究会

日本の様々な伝承世界について、文献調査やフィールドワークから研究しています。民話研究、古文書の活字化やデータベース化なども進めながら、後世に伝える方法を模索中です。くずし字から読み解いた『ばけ物三十六歌仙』の研究成果は、所蔵される村上海賊ミュージアムの特別展示に結びつきました。『尾道文学談話会会報』第12号に掲載し、インターネット上(尾道市立大学学術リポジトリ)でも公開しているのでぜひご覧下さい。これからも日本の魅力的な文化を楽しみながら伝えていきます。(藤井 佐美研究室)



論文の詳細はこちら



企画展示用ポスター



未整理の書籍群

虚構研究会は人文学・芸術分野の様々な事象について情報共有・意見交換を行う自主ゼミです。文字を媒体とした文学ジャンルはもちろん、視覚映像・音声・空間、さらにはそれらが複合するものも含めたあらゆるメディア上の虚構・物語・表現を、研究・考察の対象としています。

これまでに、参加者が推薦するマンガや小説を取り上げた読書会、海外アニメや映画を分析的に見るための鑑賞会、特定のビデオゲームについて考察する討論会、好きな楽曲を挙げて音楽的な視野を広げてゆく会、ジャンルを問わず自分自身が影響を受けたものについてゆるゆると語り合う会などを行ってきました。

人間が認識している世界(現実)は、人間が五感を通して得た情報をすべて人間に把握可能な形に再構成し、書き直した「虚構」です。私たちを取り巻く「現実」という「虚構」を一緒に読み解いてゆきましょう。

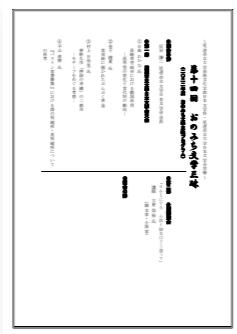
# 尾道市立大学日本文学会



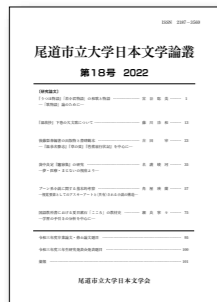
尾道市立大学日本文学会は、日本文学科所属の教員と学生を中心として、研究発表や学会誌発行などの活動を行っています。



昨年度学会大会の様子



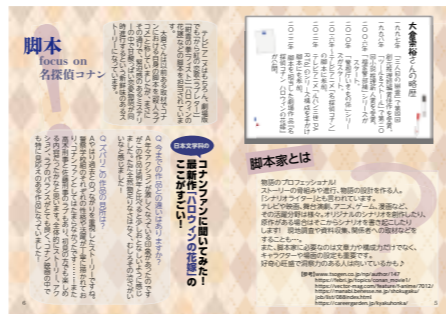
昨年度研究発表要旨集



学会誌  
『尾道市立大学日本文学論叢』最新号



## 翠幻地



2022年12月刊行の文学三昧号  
(表紙デザイン 美術学科4年 田中美帆)

『翠幻地』は学生編集委員が主体となって発行する日本文学会の会報誌です。企画、取材、構成、印刷発注等、雑誌作りの基本を学びます。

おのみち文学三昧は、尾道市立大学日本文学会と日本文学科共催の文学イベントで、学生・教員による研究発表と、外部講師を招いた公開講演会の二部構成です。

昨年度は、対面とオンラインによるハイブリッド開催となりました。

公開講演会では、劇場版名探偵コナンの脚本でも知られる大倉崇裕さんにご講演いただきました。



広報用チラシ・アイコン  
(美術学科4年 田中美帆)



大倉さんによる講演  
演題は「0を1にする 小説と脚本はどう違う？」



# おのみち文学三昧

文学三昧では、長崎県壱岐市で用例がみられる下二段活用の残存について発表しました。小さな離島の方言がテーマですが、当該地域に馴染みのない方にも論点を共有できるよう、方言文法の研究と社会言語学的な興味を掛け合わせた内容にすることが目標です。対外的な発表の機会をいただけて嬉しかったです。

日本文学科4年 日高わかな

近世期の草双紙に描かれた「ぶんぶく茶釜」について発表いたしました。発表を通して、自分の研究と向き合う事ができ、研究テーマの魅力を再発見することが出来ました。ほかの発表者の方の発表も大変興味深く、自分の知らない分野に触れる良い機会になりました。

日本文学科4年 金子綾夏

文学三昧では夢野久作「押絵の奇蹟」についての研究発表を行いました。人前での発表は緊張しましたが、とてもよい経験になりました。また、論に対して様々な角度から指摘を頂いたことで、新たな論点を見出すことに繋がりました。

日本文学科4年 村上日佳里



